

第二卷

目次

巻頭言

北朝鮮強制収容所を「忘却の穴」とする
な

小川晴久

フォーラム

北朝鮮体制とのつながりから見たソ連
強制収容所の本質

加藤哲郎

証言

「人民の敵」は暴力によって造られる

安赫(アンヒョク)/ジャック・ロッシ

資料

北朝鮮日本人妻望郷の碑(いしぶみ)35
年

活動記録

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会の
活動

北韓同胞の生命と人権を守る市民連合
の活動

北朝鮮強制収容所を

「忘却の穴」とするな

小川晴久(守る会代表)

フランス人ジャック・ロッシさんの 2 冊の本『ラーゲリ強制収容所註解事典』『さまざまな生の断片』を一読して感じたことは、北朝鮮の収容所のことはほとんどすべてここにある(確認できる)という驚きであった。

ハンナ・アレントの大著『全体主義の起原』を通じて、金日成の体制が根拠づけられ、説明されたからであった。

1960 年代前半に帰国した北朝鮮帰国者たちは、帰国した数年後から全体主義の移行期に直面することになった。そ

の悲劇の過程が、徐々に見えてくる。

昨年、24 年間ものソ連のラーゲリ(強制収容所)生活から生還したフランス人ジャック・ロッシさんの2冊の本が日本語に訳され、出版された。1冊は『ラーゲリ強制収容所註解事典』(原典の露語の書名の英訳は、THE GULAG HANBOOK - A Historical Dictionary of Soviet Penitentiary Institutions and Terms Related to the Forced Labours Camp、出版社と出版年は、Overseas Publications Interchange

LTD , London , 1987)、もう 1 冊は『さまざまの断片』(FRAGMENTS DE VIES , Jacques Rossi , ELIKIA , Paris , 1995)。前者はラーゲリの、その実「ソビエトの公私全生活の百科事典」、後者はラーゲリの人と生活の点描である。後者から著者や訳者の了解を得て、本号で2つの話を紹介できることに感謝したい。

前者からは本誌でこれから(著者・訳者の許可を得て)何回かにわたって北朝鮮の政治犯収容所と類似する所を、その一日も早い解消を願う立場から紹介していくことになる。

一例を挙げよう。「取調べ官」という項には「良いソビエトの取調べ官とは、真

実を明らかにする者ではなく、予め与えられた指示に従って、起訴条項と処罰を確実にするデータを出す者である」とある。この簡潔な説明にはロッシさん自身の体験と24年間収容所で会ったすべての囚人の体験が凝縮されている。一読して感じたことは、北朝鮮の収容所のこととはほとんどすべてここにある(確認できる)という驚きであった。北朝鮮はもっと野蛮で、記録すら杜撰(ずさん)という違いはあるとしても。

数日後、大変遅まきながら、ハンナ・アレントの大著『全体主義の起原』(英語

版 The Origins of Totalitarianism, 1951。これを加筆・修正したドイツ語版は1955年、1962年に刊行。日本語版は1962年版を底本)の第3巻「全体主義」を一読した。私はロッシさんのラーゲリ事典とは違った意味で深い衝撃を受けた。金日成の収容所体制の特徴(国家保衛部による警察的軍事支配や、すべてにわたる二重基準 = ダブルスタンダード = 二枚舌、法的人権の抹殺等々)の同じものが、歴史的、理論的にすべてスターリンの体制下で指摘されていた。私は長い間、共産主義国家体制を全体主義と呼ぶことを拒否してきた。しかし本書が、レーニンの挫折(それは「彼がソヴェ

ートという選挙による評議会に集中させようと意図してきた国家の本来の権力が、内戦の圧力のもとで党官僚機構の手に渡ってしまったとき」に起こった)以後、全体主義が芽生え、スターリンが全体主義的支配(党と秘密警察と強制収容所の3つの手段で支配。国家機構は名目的)を確立したことを溢(あふ)れるように立証しているのを知ったとき、私ははじめて全体主義の何たるかがわかった。私にとくに説得力があったのは、金日成の体制がこれですべて根拠づけられ、説明されたからであった。言い換えれば、金日成体制の解明の書としてこれを読むことができたからであった。

北朝鮮社会では行方不明者が多く、誰が収容所に入れられたかが外部に不明にされている特徴点は、「忘却の穴」という次の規定で見事に解明されていた。

「警察の管轄下の牢獄や収容所は単に不法と犯罪のおこなわれる場所ではなかった。それらは、誰もがいつなんどき落ちこむかもしれず、落ちこんだら嘗てこの世に存在したことがなかったかのように消滅してしまう忘却の穴に仕立てられていたのである。」

とくに金日成体制という全体主義が北朝鮮の歴史のいつ頃から形成されたか（換言すれば、上記の「忘却の穴」という地獄のような強制収容所がいつ形成さ

れたか)を判定するメルクマール(指標)となる次の規定と出会ったとき、私はどれほど本書に感謝したかしのれない。

「1920年代でもロシア国内の内戦期でもなく、反革命的反対派も党内反対派もすべてことごとく一掃されていた1930年以後になって、ロシアにおける真の恐怖政治ははじまった。」(第3章全体的支配、1、国家機構)

「完全なテロルの支配は、その対象となるべき反対派のすべてが消滅した後にはじめて開始されるのである。」(第4章イデオロギーとテロル)北朝鮮の全体主義への移行をいつに見るか。延安派、ソ連派を一掃した後の1961年の第

4 回党大会と見るか、金日成派が中央委員の多数派となり、唯一思想体系を確立した 1967 年 5 月の中央委総会とみるか。私は最近韓国の総合雑誌『思想界』1967 年 1 月号所載の「金日成体制論」(金昌順)という論文と出会った。1966 年 10 月 12 日に開かれた朝鮮労働党中央委第 4 期第 14 回全員会議で行われた党機構の改編(党委員長制を廃止し、総書記をトップとする書記局制を採用)とパルチザン派軍人の大量進出をもって金日成独裁体制の完成を見るという主旨であった。ハンナ・アレントの全体主義組織論を読んだ直後であっただけに、大変説得力があった。

1960年代とりわけ後半に、北朝鮮は全体主義へ大きく移行したと考えることができる。1960年代前半に帰国した北朝鮮帰国者たちは、帰国した数年後から全体主義の移行期に直面することになった。その悲劇の過程が、徐々に見えてくる。今こそソ連の収容所体制の経験（記録と分析）を総動員して北朝鮮収容所体制を解明しなければならない。

フォーラム

北朝鮮体制とのつながりから見た
ソ連強制収容所の本質*

加藤哲郎(一橋大学教授)

* 1996年9月21日に開かれた、守る会
主催の講演会から

はじめに

強制収容所というのは、基本的には政治犯を入れるために、ロシアの帝政時代に作られたものです。一般 刑法犯も含めて、犯罪者を矯正する、犯罪者を作り直すという名目で、さまざまな労働につかせ、死んでしまったらそのまま、工事中の海の土手とか、鉄道の枕木の下とかいうところに埋められていくというのが、強制収容所の実態でありま

す。

ソ連の強制収容所について書かれたもので、信頼できる著作に、まだソ連が崩壊する前に書かれた作品で、ロイ・メドヴェーエフの『共産主義とは何か』と日本語で訳されている『歴史の審判』という本、ロバート・コンクエストの、日本語では『スターリンの恐怖政治』と訳されている本、それからソルジェニツインの『収容所群島』、この3つの著作があります。

この3つの著作は、ソ連が存在していた時代にも、我々が世界において信頼できるただ3つの著作であったわけですが、しかしソ連崩壊後の今日でも、全体的な像を知る業績としての価値は、変わ

りません。

この3つの著作から、私たちは強制収容所の中身、強制収容所が存在することによって、その社会がどういうふうになるのか、ということを知ることができます。そこから浮かび上がってくるのは、次のことです。

強制収容所の社会的機能

・政治犯という名の奴隷労働力

一つは、政治犯の収容所ということになっておりますから、政治的な理由で入れられたのだらうと一般に思われるかもしれませぬ。例えば北朝鮮に帰国して、収容所に入れられているかもしれない

日本人妻なり在日朝鮮人は、金日成にたいして、政治的に反対したり、あるいは何か政治的な批判をしたために、入れられたんじゃないか、と。

しかし、旧ソ連の経験に照らせば、恐らくは、本当に政治的にスターリンに反対して処刑される人というのは、1000万人のうちの100万人、いや、一割というのは多すぎますね、恐らく5%ぐらいと見積もった方がいい。残念ながら、私たちが知っているのも、例えば日本人でスターリンに粛清された人は、共産党の指導者であった山本懸蔵とか、あるいは国崎定洞という人も、いわゆる32年テーゼを日本に伝えた人達は、きっと、ソ連の

指導部に反対して、トロッキストと言われて粛清されたのだろう、というふうに思ってきましたし、これらの人達については、ある程度それがあてはまります。

朝鮮の例で言えば、金日成に本当に心から反対した人も当然いるでしょう。しかし、そういう人は、実はほんの一部で、ロシア人の場合でもそうであります。1000万人が通常 1936 年から 38 年に殺されたと言われますが、その中で共産黨員というのは 100 万人にも満ちません。ロシアには当時、200 万から 300 万の共産黨員がいたと言われていますが、そのうちの 100 万人が殺されているわけです。しかし、全体の収容所に入れられた

人、それから殺された人から見れば、それは5%ぐらいです。

例えば、働いていたモスクワの食品工場で、ある日、日本人の労働者が同僚のロシア人に「今日の昼もまたジャガイモ一切れか。ひでえな、このロシアって国は。」と言ったというのが、次の日には、同僚が秘密警察に密告して、これが国家反逆罪。旧ソ連の刑法 58 条 6 項はスパイ罪、国家反逆罪になるのですが、この6項というのは実は刑法典で見ますと20何項目に分かれておりまして、とにかく何か、ソ連なり指導者なりに対して、不満なり陰口を叩いたとすれば、その陰口を聞いたのに、それを警察に届け出

なければ国家反逆罪になるというものなのです。

そういうので捕まった人達というのが、圧倒的なわけです。それから、一般刑法犯で入れられている人でも、パンを一切れ取ったのですが、今、社会主義建設に一生懸命携わっているときに、その社会主義的な人民の作物であるパンを取ったんだから、それは、国家に対する反逆であるということで、単純な刑法犯が国家犯に仕立てあげられるのです。こういう事例が無数にあるわけです。このような例は、ソルジェニツインの『収容所群島』の中に沢山でてきますが、現在それを立証する文書が、いろい

るな形で出てきています。

端的に言えば、それでは、政治犯とは何だったのか、と言いますと、一部の政治指導者の場合は、確かに政治的な理由で捕まっている可能性はありますが、恐らく、それ以上に、大多数の人達は、むしろ無償労働力、あるいは奴隷労働力として使われている、というふうに考えたほうが正しいと思います。

つまり強制収容所というのは、日本で言えば、公共事業とか、経済学用語で言えばインフラストラクチャー、道路とか港湾とか石炭掘りとかエネルギー供給とかそういう事業に必要な労働力を賃金なしで獲得するための、一つの重要な部

署になっていたというのが、1930年代のソ連です。

これは発端は違います。帝政ロシア時代には、極めて純粋な政治犯の収容所でした。ロシア革命の直後も、政治犯を中心に旧エス・エルとか旧ブルジョアジーとかを入れておく所でした。しかし、そういうものが一旦できて、それが社会主義計画経済のなかに組み込まれて、何か突貫工事なんかをやるときに、そういうものが一番、自由につかえるということになって、その経済が動きだしますと、この経済はそのまま自己回転していきます。

ソルジェニツインも書いていますが、30年代に入ると、ソビエト経済そのものの中にくみこまれ、強制収容所がなくては、回転しなくなってきた。社会主義というのは、強制収容所の労働力なしでは回転しないような、そういうシステムができてきた。

なぜならば、例えば、運河を3カ月で作れというスターリンの命令が来た。どうやって労働力を調達するか。付近の一般市民を動員するというのには、それなりの法的手続きがいる。誰ならいないか。囚人だ。囚人はどこにいるか。強制収容所にいる。それをシベリアからでもどこからでも移ってきて、働かせればい

い。

しかし、そんな突貫工事、24時間働かせて、命がなくなったらどうするか。それも、土手に埋めればいい。こういう仕組みであり、その記録は名前だけは残りますけれども、一切、沈黙の中に葬り去られる。こういう関係が生まれたということでもあります。

従って、強制収容所というのは政治的なものであるということは、その発生については間違いありませんけれども、それがビルト・インされた社会というものは、奴隷制社会、あるいは、これは現代の世界の歴史学が新しく作り出した言葉でありますけれども、「奴隷包摂社会」と

という言葉が現れておりまして、1994 年の日本歴史学研究会でも、歴史における「奴隷包摂社会」がテーマとなりました。

奴隷制の時代だけが奴隷だというのが、社会主義の教科書の中に書いてありましたが、しかし中世にも奴隷がおりましたし、資本主義のなかでも奴隷がおりましたし、今でも、パキスタンや南アフリカやラテンアメリカのプランテーションには多くの奴隷がおります。ひょつとしたら日本のサラリーマンもある種の奴隷であるかも知れない。いわば、あらゆる時代を通じて、実は人類というのは奴隷制を残してきた。

いわゆる社会主義、現存した社会主義

の中には、奴隷制というものが、その社会主義建設に必要不可欠のものとして組み込まれていた。このことが重要なポイントであります。

・強制収容所があることによる「娑婆(しゃば)の生活」=「絶えざる恐怖」体制

もう一つのポイントがあります。それは、強制収容所があるということは、強制収容所の中だけの問題であろうか。強制収容所に入れられた人の苦しみは、手記や記録を見てもわかります。しかし、実は強制収容所があるということ

は、その社会にとってそれ以上の、強制収容所内部だけの問題ではないということが、ポイントであります。これは恐らくソルジェニツインを引き合いに出すのが正当でしょう。

ソルジェニツインは、強制収容所があることによって生まれてくる社会全体の姿を「打ちのめされた娑婆」、これは文庫本で言うと 4 巻に詳しく書いておりますが、つまり収容所群島が存在するということによって、群島の外においても、群島が存在することの効果及ぶという。

彼は強制収容所を「奈落」と呼んでおります。社会の奈落です。いつでも人々はその奈落があることによって、その奈落

に落ちるかもしれないという絶えざる恐怖をもって生きていかざるをえない。つまり強制収容所が存在するということは、強制収容所にいる人だけではなくて、その周りにいる人、その中にいない人にとっても、常にそれがあるということによって、その中に入らないように生きるということを強いるということが、ポイントであります。

彼はそれを 10 の特徴ということで挙げております。

第 1 は絶えざる恐怖。どんな大人たちも、たとえソ連共産党の政治局員であっても、強制収容所のある収容所群島の中においては、収容所群島の存在し

ている島の外、つまり「娑婆」、世間においても、あらゆる人々は、絶えざる恐怖の下にある。いつ自分は、明日にでもそこに落ちるか

もしれないという恐怖におびえながら、暮らさなければならなかった。

第2は定住制度。強制収容所には狭義の政治犯はいます。それ以外の、だれを入れ、だれを入れないかということは、それを支配する国家ないしは党、ないしはその指導者が決めます。それを決めるためには、すべての人々についての情報が集中されていなければいけません。そのためには人々が自由に動き回ってはいけません。したがって、す

べての人々は、旧ソ連の場合にはパスポート、身分証明証を常時持ち歩かなければいけなかったわけです。常に強制収容所にいる者といない者を区別する証書というものを、外にいる人達ももっていなければならない。これには住所が明記されていた。行方不明はあってはならない、ということです。

行方不明というのは、収容所群島の中に入ったところでなるのであって、強制収容所の外にいる人達は全てがつかまわれていなければならない。

第 3 は秘匿性、不信。収容所が生まれる前の社会にあった、開けっ広げな気分、人々の交際というものが無くなってし

まった。つまり、だれでもが、いつでも、
その話している

相手が収容所群島に入って、政治犯と
されるかもしれない、という気分をもって
生きている社会においては、その中に入
っていない自分も、いつ入るかわからな
い。そうしたら、その人と話すときには、
その人が収容所に入れられて、お前ス
パイだろ、と言われて、一緒に話してい
た相手もそうじゃないかと言われて、そ
れを自白されたらかなわない。常に絶え
ず自分を守り続けなくちやいけないとい
う心理が生まれる。そこから生まれるの
は、社会全体の、全面的な相互不信と
いうふうに言っております。

第4は全面的な無知。真実の情報はだれが持っているのか。全体状況について知っているのは国家ないしは党ないしは偉大な首領、ということになる。そういうもとでは、互いに人々が相互に不信を持っている状態をそのまま維持していくために、情報は、もちろん、人々に対しては、意識的に流されるものはあります。

例えば、1937年のロシアの新聞には、「現在ロシアにいる全ての日本人及びドイツ人はスパイと思え」というのが、公然と書かれているわけです。

コミュニストであれ何であれ、とにかく、敵国、ヒットラーのドイツと軍国主義の日

本からやって来ておる者は、スパイと思え、というのが論説で流されているわけです。そういう情報は流されます。しかし、真実の情報は、党しか、あるいは国家しか握っていないということになりますから、人々は全面的な無知を享受します。だれかある日いなくなったら、この人は捕まったんじゃないかと思 わざるを得ないけれども、それを確かめる術はない、そういう社会の中におかれるということであります。

第 5 はその必然的な結果としての密告制度。つまり全面的な無知のもとで人々は絶えず捕まっている。そのだれを捕まえ、だれを捕まえないかという情報

は、国家なり秘密警察が握っている。その秘密警察が、じゃあどうやって、だれを一番先に捕まえ、だれをクビにするか、ということを決めているかという、これは、最近になっていろいろと出ておりますが、一つはノルマというのが

ありました。1937年から39年のソビエトにおいては、確実に、粛清のノルマというのがありました。

例えば、シベリアの州の町ではどのくらいの人数を今週中にスパイとして摘発せよ、というふうなのが、出ておりました。大ざっぱに言えば、党の書記局からある州に対して、何十万人とか何万人とかいう指示が来まして、それを

分割していきますと、お前のところでは何人というふうに、その上のほうからノルマがやってきたときに、提供しなければいけない情報というものがいます。

地元の秘密警察なり地元の秘密委員会は何をやっているかという、そのリストを作っているわけです。5人出せという指示が来たら、上から5人出す。じゃあどうやって1番から5番を決めるか。

それが、密告制度というものの意義でありまして、周りからの情報で彼は怪しいと言われているような、つまり、一応、強制収容所に入れるための情報を、絶えず持っている。すぐに出すんじゃないんですね。ノルマが来たとき、これ

は生産と同じですね、10 人でいいというのに 20 人 30 人出しますと、次回来たときに、またそのくらい出さなければいけませんから、そうしますと村全体が一人もいなくなったということになっちゃいますから、そういうことはしないわけですね。そういうリストが準備されているという状況が出てくるわけです。

第 6 に生存方法としての裏切り。つまり、そういう密告や絶えざる恐怖から逃れるためにはどうするか。自分自身が捕まえる側、売る側に回る。したがって、強制収容所のある世界では、裏切り、密告というものが、体制としてビルト・インされることになります。

第 7 に墮落。収容所にいる人達は精神も肉体も抹殺されます。しかし、収容所の外にいる人間は、肉体だけは残されるけれども、精神は死んでしまう、というのが、ソルジェニツインの命題であります。つまり、今言ったような雰囲気の中で生きているというのは、生きていることの重要な一部である、考えるとか、人間らしく生きるとかいう意欲を無くし、かつ、良心を無くしてしまう。そういうことなしには、生きていけないということです。

第 8 に生存方法としてのうそ。うそをつかなければ、生きていけない。したがって、何が正しくて、何がうそであるかというのが、うそをつき続けているうちに分

からなくなってしまう、という状況を彼は具体的な実例を挙げていろいろに述べております。

第9に残酷。ある日自分の言ったさげない一言が、ひょつとしたらその人を強制収容所に入れてしまったかもしれない。その意味でその人の生命を奪ってしまったかもしれない。しかし、それが日常的なものになっていけば、昨日この友人が消え、明日この友人が消え、周りから人が消えていく、次は自分の番だ、こういうことが繰り返されているうちにどうなるか。死とか、あるいは肉体的な破壊とか、要するに生きることの意味、正義と邪悪の間の境界、そういうものが全くな

なってくる。そのうちに、残酷さというものに対する感覚がなくなっていく。

最後に、奴隷的心理。奴隷根性と訳した方が正しいでしょう。つまり、社会の一部、強制収容所というところに奴隷が存在することによって、その社会全体の人間たちが、少なくとも精神的には奴隷になってしまう。これがポイントであります。

おわりに

1991 年になくなりました旧ソ連の体制と、現在の北朝鮮の体制というものが非常によく似ているというのは、皆さんお

気づきの通りだと思います。経済体制が、いわゆる社会主義と名乗っていること。金日成の個人崇拜と、スターリンの個人崇拜。金日成には、首領以下随分長い長い形容詞がつくそうですけれども、実はあれよりも長い形容詞が 1930年代のスターリンにはついておりました。

それを支えているのが、共産主義政党、北朝鮮の場合には労働党、ソ連の場合には共産党、の独裁。つまり他の政党、政治党派を許さないという体制であること。あるいはそのイデオロギー、スターリンの時代で言えば、マルクス・レーニン主義、今日の北朝鮮で言えば、金

日成思想というものが国教とされ、それに反するものは、遅れたものあるいは間違っているとして処罰される体制。そして、情報統制、あるいは情報閉鎖がされていて、内部の状態がなかなかわからない。

この種の問題は、私たちも日常的に把握している共通性です。ただ今日皆さんにお話ししたのは、いま言ったような、一般的な類似性に解消されないような、ある意味では特殊な、旧ソ連と今日の北朝鮮の類似性ということです。

それはつまり、強制収容所、政治犯を入れる強制収容所というものが存在していて、それがその社会の中での局所

的なものであっても存在していることによって、その社会全体が一体どういうものになってくるのか。

通常、政治学において全体主義と呼びますけれども、ある国家が公認の思想や考え方や国家が進めようとしている事業に対して、反対する者、あるいは内心反対する者、あるいはそれをこっそりと友人に話した者等々が捕まって、政治犯として牢獄に入れられるような社会が生まれることによって、実はその強制収容所の外の世界も、非常に大きな変貌と恐怖の中におかれる。強制収容所があることによってその社会がどうなるかという問題を、今日の主題にしたので

す。

以上申し上げたソ連の強制収容所体制の意味と特徴は、現在の北朝鮮の強制収容所体制を理解する大きな手掛かりになるのではないかと考える次第です。

証言

「人民の敵」は暴力によって造られる

北朝鮮の権力集団は強制労働収容所の囚人を、「人民の敵」と規定している。強制労働収容所の警備室の壁に、『わが人民の階級的敵にプロレタリア独裁をたっぷり味わせなければなりま

せん』という、金日成の「教示(教え)」が
掲示されているのを見ただけでも、それ
が分かる。

しかし広く知られているように、「人
民の階級的敵」という言葉はボルシェビ
キ革命後ロシアで使われ始め、スターリ
ン統治下では数百万の人々にこのラベ
ルが貼られた。スターリンは自分の政敵
は言うまでもなく、潜在的な反対勢力、
少数民族、または忠実な追従者までもを
強制労働収容所に送ったのだ。歴史家
たちは、スターリンは絶対権力確立のた
めに、このような恐怖の雰囲気を作成し
たと見ている。

その過程で、不法逮捕・拷問・略式裁

判・連座制など、あらゆる不法行為が行われたのは説明するまでもない。

今日ロシアは民主化され、スターリンの恐怖政治は遙か昔の話になっている。しかしスターリンによって樹立された金日成政権は、スターリンの遺物とも言える強制労働収容所を、依然として維持している。そこに入れられている人は「人民の階級的敵」とされ、人間以下の待遇を受けているのだ。

ある日、何の罪もない平凡な市民が政治警察に捕まり、拷問と長期拘禁で「人民の階級的敵」に転落して行く過程も、スターリン時代と全く同じだ。1930年代モスクワで、罪のない一人のフランス

人青年が受けた経験と、1980年代平壤
でたいしたことない罪で捕らえられたあ
る北朝鮮の若者の体験は、この事実を
生々しく立証している。次は、二人の当
事者の証言である。(編集者注)

安赫氏の証言

1980年代の北朝鮮

略 歴

1968年1月3日 慈江道(チャガン

ド)満浦市(マンボシ)で生

まれる

1979年9月1日 国家代表養成機関

である中央体育大学入学

1986年1月 大学在学中最年少政治

犯として収監。

1987年11月17日まで国家安全保衛部

秘密拘留場(平壤近郊のマラ

ム招待所)に収監

1987年11月17日から1989年2月28

日

まで最年少で咸鏡南道(ハム

ギョンナムド)耀徳郡(ヨド

フグン)政治犯収容所に収監

1992年 北朝鮮を脱出。

1992年 8月 韓国に亡命。

現在 漢陽(ハンヤン) 大学経営学

科在学中。

ガキ反動を逮捕しろ！

1986年 月 日、満浦(マンボ)市(慈江道にある街))の古くてジメジメした国家保衛部の建物に足を踏み入れた瞬間、私の人生の前半部が終わった。

それは、新しい始まりを期待する終わりではなく、あらゆる事が完全に屈折し断絶される、暗い奈落に墜落したことを意味する終わりだった。

満浦市は中国との国境地帯、鴨緑(アムノックン)の川辺に隣接している都市である。

「何の用だ？」

訪問客のいない午後のせい、保

衛部事務室では職員が一人でその部所を守っていた。暇でウツラウツラしていた彼は、私の出現が嬉しくなかったようで、神経質な感じでぞんざいな言葉を投げ返してきた。

「あの、私、中国へ内緒で行ったんですが...自首しに来ました...」

軽い気持ちで来たのだが、いざ言葉を切り出そうとすると、私は胸がドキドキした。

「何だと？」

私の言葉を聞いた男は、ピョンと跳びあがるように驚き、その場を蹴飛ばし立ち上がった。

「ちゅ、中国に行って来たって？ お

前が？」

「はい。それで自首をしようと。」

「いや、この野郎、今、誰を驚ろかしているんだ？ほお本当に...これ見ろ？お前、一体何しているガキなんだ？」

食いかかるように私を脅していた彼は、すぐに空いた口が塞がらないという表情になった。見た目にも幼っぽい子供が自分の足で訪ねて来て、自首うんぬんなどと言うのだから、信じられる筈もなかった。

彼は机の上の受話器を引っ張った。

「ここに変な奴が一人来たんですが、どう見ても頭がおかしいようで。その、自分の口でしきりに、中国に行って来たと

言うのですが。」

私をジロジロながめながら、通話していた彼の表情が、突然硬くなった。

「はい？ はい！ 分かりました。」

相手が何と言ったのか、ぎこちない音声で答えた彼は、あたふたと紙を持って来て、私の前に座った。

「お前、名前は何だ？」

彼があれこれ私の身の上について質問をしていると、四十代前半に見える一人の男が早い足取りで入って来た。

「こいつか？」

彼は私をズキッと刺すような視線で尋ねた。彼の鋭い目つきを見て少しおじけづいたが、私は一生懸命、泰然とした態

度を取った。

「お前が、中国に行って来たのか？」

「はい、そうです。」

彼は私の身上調書を受け取り、くまなく見て、根掘り葉掘り幾つかを確認した。

「家に電話しろ。」

彼の口から故郷の事が話題になったので、私は『もう大丈夫』と思った。

黄海道(ファンヘッド)保衛部に引き渡されれば、その後は父が皆処理してくれると信じていた。黄海道保衛部関係者と通話している様子を聞いていると、あちらでも私の身上に対してよく知っているようだった。

彼らは私が、恵山市(ヘサンシ)白頭山(ペクトウサン)の近所に、友達と遊びに行っていた事実を確認した。黄海道では私を、自分達の方に引き渡して欲しいという様子だった。

私は『万事上手く行った』と軽い安堵感に浸っていたが、それもしばらくだけだった。満浦市の保衛部員達は、私を引き渡そうと考えてもいないのだった。

それどころかだんだん深刻な表情になり、自分達だけで何かひそひそ話をしては、あちこちに電話をかけまくった。

初めは彼らも、「どこかから気が狂った奴が現れて、厄介なことを起こした

な？」と軽く見ていたのに、黄海道保衛部からひっきりなしに私を引き渡してくれ
というので、「大事件ではないか？」と、
非常が掛かつたのだった。

「お前、中国に渡ったのはいつだ？」

新しく事務室に入って来た内の一人
が、場所を陣取って座り、本格的な尋問
が始った。満浦市反探(反逆者探査)課
長という彼の表情は、鉛のように堅苦し
かった。私も、今さらのように緊張が急
に襲い、知らずに体が震えた。何かまず
い事になっていると、直観的に感じた。

反探課長は姿勢も崩さず、ずっと一
日私の行跡を根掘り葉掘り聞き出した。

「中国へ、何をしに行ったんだ？」

「友達と遊んでいて、好奇心で国境を越えました。」

「好奇心で？面白がって？おい、お前今、だれを馬鹿にしているんだ？最近中国が発展していると言うのに、自分の足で、また帰って来たなんて説明になるか？」

私はあるがまま言ったのに、彼らは私の言葉を素直に信じようとしなかった。

「ただ、遊びに行っただけ、見物が済んだから帰って来たのです。」

「何だと？この野郎、ただ者じゃないな！おい、俺たちを騙そうとしても駄目だぞ。事実のまま、吐いた方がいいぞ。」

お前がスパイ任務も無しに、又戻って来る筈がないくらい、赤ん坊でも分かる事だ。」

「スパイ任務なんて・・・言葉にもなりません。私の両親や親戚が皆こちらにいるのに、私がどうやって中国で暮らすというのでしょうか？」

悔しさが喉まで溢れ、怒りの声を吐き出したが、彼らは私をスパイに仕立てると決めこんだようで、その方向にだけ尋問を誘導し続けた。しかしあらゆる懐柔と脅迫にも、私がスパイ嫌疑を認めないので、反探課長は私を「拘留場にぶちこめ」と指示した。

「お前は、これから予審を受けること

になる。しっかり気を引き締めろよ。」

最初に出会った保衛員が、横の建物に私を連れて行って、低い声で教えてくれた。私は悔しさにとまどい、憤りでごちゃごちゃになり、どうしたらいいか分からないまま、真っ暗な長い廊下を歩いた。一体、私の何が悪かったのだろうか？

拘留場の建物は真っ昼間でも、室内がよく判別できない程暗かった。暗さに目が慣れた頃周りを眺めて見ると、廊下の両側に汚らしい青い色のペイントを塗った狭い部屋が、マッチ箱のようにつながって、数十個もぎっしりくっついているのが目に入った。

拘留場に入る前、私はまず、待機室に押し込められた。四人の男が、私の周りをぐるりと囲んだ。戒護員(看守)という彼らの表情は、とても険悪だった。

「おい、服を脱げ！」

「こ、ここですか？」

突然、なぜ服を脱げと言うのか分からず、もじもじしていると、みぞおちの下に鋭い痛みを感じた。体の均衡を失い、前にどっとのめっても、彼らは少しの余裕も与えず、革靴で体のあちこちを手当たり次第に蹴とばし、「早く服を脱げ」と催促した。

「完全に皆、脱げ！」

瞬く間に全裸にされた私は、恥ずか

しさと恐ろしさがごちゃごちゃになったまま震えて立っていた。彼らはナイフを取り出し、すばやく服のジッパーを切り取り、ボタンを剥ぎ取った。手慣れた動作だった。つなぎ日のある襟や、袖の部分まできれいに切り取ると、服を投げ返してきた。

ぼうっとしておおざっぱに服をひっかけ、命ぜられるままに生年月日、住所を書いた。その中の一人が私の手首に手錠をはめた。がちゃんという金属音があった瞬間、「自分は本当に、来てはいけない所に来てしまった！」という後悔が、不意に襲ってきた。

私は一番奥の部屋に入れられた。拘留場は奥行2.1m、幅1.5mだが、部屋というより狭苦しい空間でしかなかった。前には10センチ程の大きさの鉄格子の天窗がはめられ、出入口の鉄の門もまた、体を広げて出入りできない程狭かった。鉄格子の窓からは空が15センチ位のぞけたが、日の光はあたらなかった。

鉄の門の下には飯をくれる穴があり、上には看守がのぞき見る監視用の穴があった。廊下では武装した看守が一人、休まずに行ったり来たりしていた。

満浦市保衛部拘留場での三ヵ月、私は今日明日にもと、黄海道に引き渡され

る日だけを待っていた。しかし時間が過ぎる程、希望は遠ざかるばかりだった。

月が越すと、「家でも私を放棄した」と思い、自暴自棄の心情に陥った。あとで知ってみると、父が私をやっと探しだし、(私が)国家保衛部(マラム招待所)にいるときの担当局長に会い「引き渡してくれるよう」頼んだのに、私が「資本主義に染まったので、しっかり教育している最中だ」と言ったという事だった。八方手を尽くしてくれていたのだった。

「中国へはなぜ行った？」

「一緒に行った奴の名前を言え！」

「川は、どうやって渡った？」

「中国では、誰と会ったんだ？」

彼らはあきあきとするほど、同じ質問を繰り返した。中央体育学院に照会し、私の学校時代の生活記録と技術(卓球評定書、表彰関係まで調べて騒ぎたてた。

「調べてみると、トンム(君)は思いっきり、自由主義に染まった生徒だったんだな。日頃の腐りきった思想から見て、『中国でスパイ行為をしなかった』、という君の言葉を信じる事はできない。」

彼らは私を呼び出し、脅し、なだめすかし、脅迫し、スパイ行為を既成事実にしたため、あらゆる努力をした。

スパイでない事が確認されれば、出れると思っていた私の考えは、本当に純

真などうしようもないものだった。

「長白(国境越えた中国の街)に、行って誰の家にいたんだ？」

私は余りに鞭をくらったせいか、中国での事を話したくなかった。

「おい！お前が嘘を言っても、皆知っているんだから、正直に言った方がいいぞ。誰と一緒にいったんだ？」

私は、自分の友人が私のように調査を受けたり、被害を被るのを見たくなかったからなのか、自分なりの義理の観念からなのか、否認した。

「本当に、一緒に言った人はいません。私一人で行ったのです。」

「このガキヤ！お前、そうやって台無

しにすると、いい事ないぞ。お前の家柄を調べて、親切にしてやっているのに、少しはわからんか？本当に、死なないと正気にならないのか？」

彼らは調査中にも、平気でげんこつを振り回した。

「この悪ガキ！お前がスパイでなかったら、中国まで行って自分で帰って来て、わざわざ自首して来るわけがあるか？」

死に向かう扉 マラム招待所

「悔しいです！私は絶対にスパイではありません！中国に確認して見て下さ

い！」

調査を受けるたび私は、潔白を主張して中国での私の行跡の調査を要請したが、私の言い分はことごとく嘘とされ、黙殺された。

その間、満浦市保衛部から上級機関の慈江道保衛部に移送されたが、「スパイ任務に対して自白しろ」(当時は中国の開放と関連し、中国国境問題が非常に警戒されていたと後に聞いた)という、尋問内容は変わりなかった。

満浦市の拘留場から出る時、彼らは私に誓約書を書かせた。そこで有ったすべての事を絶対に口に出さない事と、万一言った時には憲法に明示された法的

責任を負う、という内容だった。

その後も私は他の機関に移動するたび、そのような誓約書を繰り返し書いて署名した。

道保衛部で私は一日四時間の寝る時を除いては、明け方から夜遅くまで繰り返される尋問に苦しめられた。彼らは私の事件を道保衛部の線で終わらすため、あらゆる脅迫と懐柔、殴打を併せて行い、スパイに関する私の自白を引き出そうとした。

それでも一日中、不動の姿勢を取らされた市保衛部拘留場よりは、取調室に行ったり来たりする方が良かった。

道保衛部で調査を受けた一ヵ月後に、私は護送員三人の監視を受け、平壤行きの列車に乗った。私の事件は結局、国家保衛部にまで上がってしまったのだ。

列車に乗っている途中、跳び降りたい衝動に駆られたが、それは父母や妹にまで被害をおよぼす事になるのでぐっところえた。また、気持ちもぼーっとしていた。

西平壤駅に到着すると、護送車一台、乗用車一台、四人の護送員が出ていた。彼らは私を、そのままで送らない事はハッキリしていた。私は、彼らに連

れて行かれるまま車に乗せられ、どこか分からない山道をしばらく走った。

夜中の十二時近くなってやっと、真っ暗な谷間で車が停まった。後で判った事だが、そこが即ち国家保衛部一局が管理する秘密招待所で、一名『マラム招待所』という所だった。

平壤市紅城(ホンソン)区域マラム洞に位置するマラム招待所は、四方を山で囲まれた上に、その周辺が衛戍区域(陸軍駐屯地)になっていて、住民の接近は完全に禁止されていた。そこはそれ自体が拘留場で、予審を受けるようになっていて、施設は良い方だった。

私は車を降りると体を調べられ、名前を書いて建物内に入って行った。

高い塀に囲まれた招待所は、一号棟から六号棟までの建物でなっている。建物の半分は地下に、残り半分は地上に建てられた平屋建てだった。一つの棟には部屋が四つずつあるが、二重の鉄扉で遮断され日光は少しも入って来なかった。

部屋の中にはベッド、机、椅子が一つずつ置かれ、薄い仕切りの中に水洗式便器があった。窓にもやはり鉄格子がはまり、外は見えなかった。マラム招待所の規定は満浦市拘留場の規定と、まったく同じだった。飯を食べる時も、用を

足す時も看守の許可を貰わなければならなかった。眠る時には毛布を胸の高さ以上に掛けられなかったし、腕は毛布の外に出しておかなければならなかった。灯は二十四時間ついていて、初めて入って来る時と出て行く時を除いて、外の見物は一切出来なかった。

看守は一日八時間三交代の勤務で、囚人の一挙手一投足を徹底的に監視し、記録帳に書き留めていた。看守はほとんど、歳が三十前の党幹部子弟達だった。彼らは入党時期を早めるため、自願して入ってくる事が多かった。社会では普通十年もかけないと入党できないが、招待所の看守を勤めると、三年の

内に入党 が可能だったからだ。

私は招待所に移送された次の日の朝、局長と副局長をはじめとする担当予審員に会った。

彼らは穏やかに話しをする間に も、きつい脅迫を挟み込むのを忘れなかった。

「ここでは、何でも事実だけを言わなくてはならない。もし少しでも嘘を言った日には、命が危ないぞ。」

一旦招待所に入れられ、予審を受け始めると日付の概念が無くなり、歳月が過ぎるのも分別できなくなる。私は「予審対象になった以上、

誰でも真っ直ぐ家に帰るのは不可能だ」と、招待所に入れられた後にわかった。

招待所の次は、教化所や収容所行きなのだった。

私を尋問した予審員の中では、玄正植(ヒョン・ジョンシク)という予審員が、最も酷く私をいじめた。

「おい！お前も辛い味は皆味わっただろうから、死ぬこと位は恐くないだろう？だが問題はそう簡単ではないぞ。お前は死ぬことだけで終わって良いだろうが、お前がしくじると、お前の両親や妹は勿論、お前の一族皆一緒に滅びるのだ。分かるか？」

彼は何枚もの書類を振って見せ、「そこに書かれた事実を認める、という何文字さえ書けば良く面倒見てやる」と懐柔した。書類には、私がスパイ行為をしたという、嘘の証拠が数々書かれていた。

私は顔も上げず、彼が聞く事に一切答えなかった。後に判ったが全国大学生講演資料に、「ブルジョアに染まり、学校生活もまともに送らず遊んでばかりいて、中国でスパイ任務を受けて来た」とあったらしい。

「俺も今まで色々な奴を扱ったが、こんな悪質反動は初めてだ。」

彼は書類綴じを私の顔に投げつけ、ののしかった。玄正植の声が大きくなると、

待っていたかのように看守が入って来て、軍靴で全身を蹴とばした。

「玄同志、こんな奴は、いっそ殺してしまうべきです。生きる価値も無いのに、なぜ生かしておくのですか？」

看守はそんな言葉で、予審員にあらゆるおべっかをつかった。

予審員が出て行くと、看守が根掘り葉掘り聞いた。彼らは資本主義国家や、外国の女に関心が多かった。

特に南朝鮮出身収監者達をつかまえては、「南朝鮮の女はどうだ」としょっちゅう聞き出した。

「お前、陳述は正直にした方がいいぞ。お前のように、そうやって我慢してい

ると、十年でも二十年でもここにいなくちやならないぞ。」

彼らは私に中国に対する雑多な質問を投げかけ、そう付け加えた。

「私は事実だけを言いました。」

「この畜生！口ばかり達者で...こいつはハツキリ、スパイだ。自分から中国に行って来たただけなんて、言葉になるか？」

彼らは、私の唇をつかんで目茶苦茶にねじり、食いしばった歯の間から言葉を吐いた。

予審を受け拷問されるたびに、満浦市保衛部に自首した事が思い出され、数百回以上も胸をかきむしたが、こぼ

れた水、「覆水盆に帰らず」だった。悔しくて泣きに泣いた。彼らがなぜ私を、何故かたくなにスパイに追い込もうとするのか、理解できなかった。

しかし、捕まってつらい思いをしているのは私だけではなかった。幾らも立たないで私は、囚人達のほとんどが罪とも言えない罪をかぶせられ、死ぬような思いをしている事実を知った。

その中には、酒の席で言葉一つ間違っただけで捕まった人もいた。

私の隣の棟に入って来た、金一男（キム・イルナム）という人は、元来陸海運送部で働いていたという。

彼は北朝鮮国籍者だったので行動の

制約を多く受け、ドルを使うのに不便な点が多く、金日成の肖像バッジをはずし、華僑の真似をして捕まった。

その横に収監されていた李光一(リ・グワンイル)は、金日成大学の物理学科を出た人で、私と似た境遇でソ連の見物をしたくて、石炭車の中にそっと隠れ旅行していてハツサン駅で捕まった。

金明俊(キム・ミョンジュン 33歳)は高麗ホテルの案内員だったが、4.15(金日成の誕生日)春の芸術祝典の時に来た外国人の部屋に、ちょっと入った事が罪になり引っ張られたという。

そうかと思えば、アンサン館でディス

コを踊って入れられた韓相一(ハン・サンイル 32 歳)や張承虎(チャン・スンホ 32 歳)のような人もい

たし、中国留学生全勝一(チョン・スンイル)、ルーマニア留学生朴英勲(パク・ヨンフン)など海外留学生も何人かいた。

予審期間に会った人達の多くは、燿徳収容所で再び会うことになる。

「中国から自分で進んで帰って来た理由は何だ？」

それが私が最も多く受けた質問だった。又それは、いくら事実を説明しても信

じてくれない質問でもあった。

私はこれ以上予審に耐えられるような気力も無かったし、生きる意欲もだんだん失って行った。便秘がひどくて肛門から血が流れ、お尻と大腿が腐って行くのか、感覚を失った。

それに毎日の殴打で、70kg だった体重が 50kg 以下に落ちてしまい、みすばらしい事この上なかった。

「こんな苦痛を受けて生きるのなら、いっそ死のう。」

一旦「死にたい」と思い始めると、「どうしたら一時でも早く死ねるか」という事しか考えられなくなった。

死を考える時が、むしろ幸福だった。

死が苦痛をなくしてくれると思うと、現実
に受ける鞭打ちも我慢するのも楽だっ
た。

その時から私は、死にすべての希
望を賭けた。問題は死ぬ方法なのだ
が、自殺をするのも容易でなかった。

南朝鮮出身の金宗弼さんも自殺を試
みて、監視だけがより強化されたし、捨
ったガラスで動脈を切った金報国(キム・
ポグク)は病院に運ばれた。

帰って来た後彼は両腕を机の上に上
げ、命令無しには動かせない監視を受
けなければならなかった。

その時から、どうしたらばれないで死
ねるかだけ思い巡らした。体の表に傷跡

を出してはいけないし、首をくくっても直ぐに見つかってしま う。マラム招待所では、鉄窓の中ではなく庭に出て日にあたるので、釘やガラスの破片をこっそり拾えた。

特に私は掃除の仕事の担当だったので、他の人よりそれが容易だった。

私は監視を避け、目についただけ釘やガラスを、舌の下に隠して集めておいた。

まず私は紙に「私は本当にスパイではありません。」と書き、中国に行った動機と帰った理由に対しても詳しく書き、ポケットに入れて歩い

た。両親と妹にも、許しを乞う遺書も先

に書いておいた。遺書を書き終えると、「今度は本当に死ぬ事だけが残った」という悲愴な気分がした。

死ぬ方法を色々と考え抜いた私は、歯磨きのチューブを利用することにした。歯磨きのチューブはアルミニウムで出来ていたが、それを鋭く研ぎ、口の中の血管を全部切れば、出血がひどくて、気を失うまでは血を飲み込めるので、自殺の企てが簡単に発見されないだろうと考えたのだ。

私が19才に成った年の1月3日は、私の誕生日だった。

その前の日、別に悪い事もしていないのにひどい殴打をくらった私は、今や死

ぬ時だと思った。

私はトイレで、歯磨きチューブを隠れて研ぎ、ためらうことなく引き裂いた。そしてガラスの破片で手の甲の血管を切り、歯磨きのチューブと釘を手当たり次第に飲み込んだ。

なぜか何も考えが浮かばなかった。血なまぐさい臭いが口の中にぱっと散り、溜まった血が喉元をぽたぽた通り越して行くのだが、痛みも感じなかった。他の事は何も考えなかった。ただ命を完全に絶つまで、ばれないようにという思いだけが反復した。

血を飲み込み続け座っていて、血が少し止まるとトイレに行って裂き又裂

いて、口の中がずたずたになるほど引き裂いた。出て来た飯を食べないと、看守に反抗にとられるので、

飯が出るとトイレに隠れて持って行き捨てた。

どれ程そんな事を繰り返しただろうか、ついに気をしっかり持つのが辛くなってきた。目の前がぼんやりして、意識がだんだん薄れてきた。

完全に死ぬまで舌をかんで、気をしっかりさせようとしたが、結局横に倒れてしまった。

気がついて見ると病院だった。横には看護師と二人の看守、予審員が立っていて、腕にはリンゲル注射が刺さって

いた。目を開けて看守を見た瞬間、私は
生きて目が覚めた事実

に、ぶるぶる身震いした。

死ぬ事すら思うままに出来ない事実
が、新しい脅えとして不意打ちしてきた。

「私、生きていたくありません！

いっそ殺して下さい！」

私はリンゲル注射器を抜いて放り投げ、手に触る物は何でも投げつけ泣き叫んだ。

「この死にそこないのガキ！お前一人死ねば、皆おしまいだと思うのか？てめえがここで死ねば、お前の家は制度反逆者になるのだぞ。」

「反動野郎畜生め！そうやってずる

賢く死のうだって？ガキ、てめえのせいで、監視をきちんと出来なかったと、どれほど叱られたか分かるか？」

看守と予審員は、不届きなヤツにしてやられたと思ったのだが、彼らは入院している人をどうする事も出来ず、目を三角にしてしつこく歯ぎしりするのだった。

そこは国家保衛部の病院で、招待所から車で40分くらいの地点だった。病院もやはり監獄のように壁が高かった。ただ、医療施設のある招待所と言う説明が正しかった。

医師は飲み込んだ歯磨きのチューブ

と釘を取り出す手術をした。切れた血管もあったと言う。ポケットに入れて歩いていた遺書は抜き取られたのか、脱いであった服をひっくり返して見たが、出てこなかった。

私は体が衰弱している上、あまりに多く出血したので、回復するのに時間が長かった。二月も入院して招待所に帰って来ると、口の中と首の傷がよく癒えず、全然食事が出来なかった。飲食物を飲み込むと血が出るので飯を食べないと、看守が私が断食をすと思い、容赦なく脅した。

「断食なんて、腐った南朝鮮社会なんかで有るものだ。罪を犯して入って来た

のに断食とは、どの野郎の断食だ！」
と、無理やりに飯を食べさせられたりした。

退院後一月程経ち、局長という人が出てきて、直接いくつかの質問をした。自殺騒動のせいかな、その間一度も会っていなかった。私はもう一度真心を尽くして訴え、局長にすがりついた。

「私はスパイではありません。疑うのでしたら、確認してみてください。もし私の言う事が少しでも違っていたら、どんな罰でも受け入れます。」

それからまた一月が過ぎ、局長と課長が私を呼び出した。

「お前について、具体的な確認をした。

お前の罪は、祖国を裏切った祖国反逆罪だ。しかしその間、お前の家族が党に忠実だったことを考慮し、『お前だけを革命化させろ』という親愛なる指導者同志の特別な配慮があった。ここへ来る前にお前の父親に会ったが、『思想訓練をしっかりさせてくれ』と頼んでいた。今回を機会に、頭の中に入っている腐りきったブルジョア思想を、綺麗に根こそぎ抜いて出て来い。」

彼は堅苦しく言葉を吐き捨てて、横に立っていた課長に説明を添えた。

「こいつは体育学院では、技術も良く生活も立派だったのに、どうしてか資本主義ブルジョア思想に染まったのだ。そ

れでもこいつは幸福な方だ。親戚まで、傷つく人一人無く、平壤に残るのだから。」

「お前がここに入っている間に、妹が大学に行ったのだが、どんなに大変だったか分かるか？リズム体操選手で、勉強も良く出来るし、生活が堅実だとか、お前は軍隊に行ったことに文件も直して大学に行ったらしいが、こいつの家や一族の中にこんな奴はいない。」

私は泣きながら、誰それかまわず「ありがとうございます」を連発した。中国に行ってきたのが民族反逆罪なら、「革命化」に行くだけでも 幸福だという気がし

た。

収容所に入る人々

着替えた衣類をおおざっぱに抱え、警備室を出ると、作業に出ていた人達が帰って来た。

私は余りに異様な、彼らの姿に衝撃を受けた。ぼろ布のようなぶらぶら揺れる服をまとい、顔を毛布のきれでぐるぐる巻きにし、目だけ見える人がほとんどだった。また布の外にゆがみ出た人々の顔を見ると、腫れ物から膿汁がだらだら流れ、あまりに痩せ細り、骨だけガリ

ガリに浮かんで見えた。

私もやはり招待所で一年八ヵ月という長い間過酷な調査を受け、自殺を企て出血がひどく貧血を起こしたし、休もとても痩せて骨だけだったが、彼らに比べれば健康状態はまだ良好な方だった。

あっけにとられて彼らを眺めていると、彼らはかえって私を同情の目で見て、哀れだという表情をした。

急いで頭を下げ、独身者宿舎に入ると、後ろからひそひそ話が聞こえた。

「あいつも、もう死んだも同然。」

「あいつは、マラムから来た。中国に行ってスパイ事件で長い間予審を受けたとか。」

誰かが私を指してそう言ったが、恐らくマラム招待所から先に来た人のようだった。

収容所には北朝鮮内のほとんど全ての階層の人達が、それぞれ色々ないきさつから捕えられている。北朝鮮社会で、政治的過失を犯したと判定された犯罪容疑者は、主に保衛部員の犬である情報員の密告で拘束される。

拘束される過程は、ほとんど拉致と変わりなく処理される。

拘束される人が個人の場合、社会安全部(警察)など一般機関が、正式公文

書や電話などで呼び出す。そして呼び出された場所へ行く途中で、その人を拉致する。したがって家族はもちろん、通報した機関ですら、彼がどこへ行ったのか知る術がなく、自然に「行方不明」として処理される。

こうして拉致された被疑者達の中で、軽微な犯罪や確実な物証が無い犯罪に対しては、容疑者をマラム招待所など、国家保衛部の秘密招待所に連行する。ここでは決められた期間などではなく、任意に時間を延長し(私のように一年以上かかる例も多い)調査をするが、この過程で、無理強いや自白強要と多くの暴力行為が、ほしいままに行なわれる。

すでに私も、招待所で調査を受けた時自殺を企てたが、ほとんどの人が生きる意欲を喪失し、切実に自殺を願うほど、犯罪容疑者に対する待遇は人間以下だ。

調査が終われば犯罪対象者に、「死に値する罪を犯したが、親愛なる指導者同志の配慮で、年間革命化区域へ行く事になる。」と言い、収容所に移送する。

しかし重要犯罪人の場合は刑期も知らせず、完全に密閉された護送車に乗せ、別途に教化所に移送する。

彼が捕まって行くのと同時に、何人かの保衛部員がその犯罪者の家を急襲、

全財産を没収し、その家族を収容所(管理所)に移送する。

ほとんどの犯罪者、張本人はもちろん、その家族たちは、何の罪名なのかも知らず、どこへ行くのか、訳もわからないまま、何の準備もない状態で、収容所に連れて行かれる。

それに関連する全ての事件は、国家保衛部で取り扱う事件なので、裁判も無く処理され、無嫌疑で放免されるケースはまったく無い。

北朝鮮の刑法第 51 ~ 66 条は、反革命犯罪に対して規定している。

その法の条項によれば、反革命犯罪のほとんどは犯罪の質に関係なく極刑

に処し、全財産を没収する刑罰体系を備えている。

私の親友姜哲煥の場合がまさしく、お祖父さんの罪のために家族全員収容所に入れられたケースである。

朝鮮総聯の幹部をしていて帰国した哲煥の祖父、姜泰休(カン・テヒユ)氏は北朝鮮に忠誠を尽くした人物で、はっきりした罪名もなしに謀略にかかり、ある日突然消えてしまったという。哲煥は9歳になった77年8月、祖母と父、叔父、妹と一緒に耀徳に入れられ、10年間収容所の

生き地獄を経験して出て来た。そのために彼の全ての日常生活が破壊された

のはもちろん、人生の幼年期と思春期
全体がつぶされ、両親は党により強制
離婚させられる家庭的な不幸を受ける
など、あらゆる苦しみを経験しなければ
ならなかった。*

* 安赫『耀徳リスト』(1995)

ソウル天池メディア pp. 13 ~ 17 , 22 ~
23 . 30 ~ 31 , 34 ~ 39 , 43 ~ 47 . 60 ~ 63

資 料

北朝鮮日本人妻望郷の碑(いしづみ)35
年

ニッポン放送(ラジオ)1994年12月17
日放送

1978 年栃木県に住む加藤なみさんに、一本のテープが届きました。そのテープは、日本人妻として北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)に渡った娘さん、のりこさんからの、まぎれもない声の便りでした。のりこさんの声は何かの音に遮られてよくききとれません。でも、母なみさんを案じる思いが、そして、何か切なくもどかしい心が伝わってきます。

山口県に住む高田さんに届いた一通の手紙。娘のちづこさんからでした。

「拝啓 お母さん。その後お元気ですか。ちづこも元気ですが、恥ずかしいことに、おなかがすいてたまりませ

ん。だけど、お母さんに 会うまでは、どんなことがあっても生きていようと頑張っています。お母さん、一生のお願い、一度だけ聞いてください。ところどころに借金 があります。それを払わないと人様に泥棒と言われます。お米も 80 キロ借りています。返すにはこれから 2 年働き続けねばならず、つらいです。

こちらは本当にひどいです。食べるものは今何ひとつなく、目が回るくらいです。お母さん、たくさん送ってくれとは言いません。借金を返すのに、時計か、サッカリンを送ってください。サッカリンは、さじ一杯がお米 2 キロです。時計だと、800 円か 900 円で売れます。簡単なのは

サッカリンです。送ってくだされば借金が返せます。子供が生まれても、服も買ってやれない、あわれな生活です。お母さん。手紙に書いた物、きっと、ひとつでもよいです、送って下さいね。ちづこの一生のお願いです。お母さん、お元気で。ちづこより」

老いた母のもとに届いた、娘からの無心の手紙。受け取ったつらさよりも、そんな手紙を書いた、いえ、書かなければならなかった娘の心の重さと暮らしを思い、母は泣きました。ひとしきり泣いた後、ちづこさんからの手紙を、高田さんは何度も何度も肌で暖めては読み返しました。高田さんは、ちづこさんのそして

孫たちの空腹を少しでもいやしてやりたい、その一心から、老いの身を粉にして、缶詰工場で働く毎日です。

1983 年、日本人妻近藤なつこさんから、東京のお姉さんあてに、便りが届きました。でも、その手紙は、ところどころ墨で塗り潰され切り取られていて、すだれのようになっていました。しかも、発信は 1980 年 8 月 7 日。つまり 3 年 7 カ月もかかって届いたことになります。

「こちらは 8 月だというのに、毎日秋のように涼しく、畑の野菜も大きくなりません。お姉さんには本当に心配をかけて、申し訳ありません。

この国に来てからは、手紙に書けない

ような苦勞もしてきました。年4回の祭日
だけ、ビスケット、卵、肉、油が少々配給
され、1年に1回、1世帯5メートルのき
れが配給されます。シャツ1枚買えば、
月給が無くなるほど高い。私が勝手に選
んできた道、全ては覚悟の上、ない生活
に耐えなければと思いつつも、この
後3行ほど切り取られています。「どうし
ても冬までに送っていただきたいもの
は、娘のオーバー、息子の防寒ジャンパ
ー(テترون)、女の肌着、ネルの布地
少々」この後も4行ほど切り取られてい
ます。「面白くもない手紙を長々と書いて
すみません。なつかしい、なつかしいお
姉さんへ。遠い地より。なつこ」

日本海の玄関口、新潟市。1959 年、日本赤十字社と北朝鮮赤十字会との間で締結された「在日朝鮮人の帰還に関する協定」。この取り決めに基づいて、9 万 3 千人の在日朝鮮人、そして 1831 人の日本人妻が、ここ新潟港から海を渡りました。新潟駅から北々東へおよそ 800 メートル、信濃川に程近いところに、1500 メートル余りにわたって続く柳並木があります。この通りは、ボトナム通りと呼ばれています。「ボトナム」朝鮮の言葉で、柳の意味です。この柳は帰還を記念して植えられました。当時苗木だった 305 本の柳はすくすくと伸び、今では 5、6

メートルの高さになって電信柱に届こう
としています。

船を見送った、当時の新潟県帰国協
力会事務局長小島晴則さん。

「4 時になると、岸壁を離れて、第一船
が北朝鮮に向かう。あの岸壁の雑務。も
う何とも言えないですね。ごった返す中
で、汽笛がボーツと、岸壁を離れるこ
ろになると、そのときの寒さだとか雨露だ
とか忘れて熱狂的にマンセイ、マンセイ
って、朝鮮人の皆さんは、泣き叫ぶ。岸の
ほうからもそれに答えて、テープを握っ
て、さよなら、さよならって。本当にあれ
は感動のドラマの一瞬ですね。

日本人妻といわれる、朝鮮人と結婚し

て行かれる皆さん、新潟でも何人かおっ
たんですけれども、日赤センターへ最後
の3泊4日入りま

す。そうすると一番心配そうな顔をして
いるのは、日本人の奥さんです。

それはそうでしょう。いくら旦那が朝鮮
人で自分は旦那を信じておるといったっ
て、未知の国へ帰るわけですからね。そ
んな顔を見ると、いや、もう心配いりませ
ん、と、逆にこちらもそんな声をかけてや
ったりなんかしたもんですね。」

言葉も、暮らしの習慣も、気候も違
う、異国への旅立ち。そんな旅立ちへの
不安を支えてくれたのが、「祖国は地上
の楽園、天国」そして「すぐ里帰りでき

る」という北朝鮮政府の言葉でした。

藤沢市に住む日本人妻の兄北島富造さん夫婦「第 1 回の船だった。新潟から、私もそのとき見送りに行って出してやったんですよ。そして、そのときの説明は、行ったきりじゃないんだ、行けば必ず 3 年に 1 度は里帰りをさせる、そんなに心配することはないんだ、とそういう話があったんですよ。」

毎年春になるといっせいに青々と芽吹くボトナム通りの柳並木。日本人妻たちはこの柳をいつの日か見上げることができるのでしょうか。

「敬愛する領袖金日成同志は、1994 年 7 月 7 日、激しい心筋梗塞が発生し、心

臓ショックの合併症が起こった。」(ピョンヤン放送)

肉親の絆の強い朝鮮半島の人々。7月8日、金日成主席が亡くなり、北朝鮮の指導体制が変わりました。国交の無い日本と北朝鮮の関係に変化は起こるのでしょうか。ピョンヤン、清津、開城、白頭山、万景峰、臨津江、鴨緑江、北朝鮮のどこかの町や村で、ひっそりと暮らしている、日本人妻たちの心に希望の灯はともされるのでしょうか。

不安を心の片隅に懸命に閉じ込めて、愛する夫と子供達との新しい暮らしに夢をかけた、1831人の日本人妻。その夢が無残に、理不尽に打ち砕かれて

「強制収容所」という悲しい文字。

当時帰還運動を全面的に支援した国会議員も多く、大学教授や文化人など、日本側も拍手で送り出しました。そして、日本での貧しい生活から一歩でも抜け出そうと、彼の地に渡った女性たち。中には行かざるをえない境遇であった人達も少なくありませんでした。日本にあって、いわれのない差別を受けていた、朝鮮人の妻であったことが大きな理由であり、周囲の白い目に耐え切れず、追われるように日本を離れて行ったのです。でも、そこに待ち受けていたのは、極端に貧しい暮らし。冬は 零

下 40 度にもなる北朝鮮で、暖かい布団はおろか、着のみ着のままの生活。おなかいっぱい食べたい。お金を送ってほしい。そんな便りばかりです。里帰りできないのなら、せめて、生きている間に、娘の声を聞きたいという父、母、兄弟。1988 年「日本人妻自由往来促進議員連盟」が結成されました。35 年間の辛抱、その辛抱は報われるのでしょうか。

ひもといてみれば、日本人妻たちに、やや明るい光が見え始めたときがありました。1990 年、日朝国交正常化交渉が始まり、日本人妻も、会談のテーマになったのです。そんな最中、特別に北朝鮮へ入国、ピョンヤンからおよそ 170 キロ

離れた平安北道のある都市に住む妹いさこさんに会った、藤沢市の北島富造さん。

そこで見たのは、妹さん家族が、犬や猫が食べるような鍋で食事をする姿でした。

「妹の聞くことは、こっちの親や兄弟がどうしてるか、そういうことでした。親がこっちで亡くなったと聞いたら、ガクンとして。その前に、とても会いたいという手紙が、親はどうしているかという、文通はしてあったんだが、死んだことは内緒にしてあったんですよ、教えたくないから。そこで、わしは財布から5万円とってやった。そしたらとんでもなく喜んで。そ

の時期に 30 万円あれば一生それで生活ができると、手紙にあったものですから。」「やつれるもやつれるも、半分になってた。本当にこんな顔ではなかった。もう少し若いときは丸みがあった。」「半分になったんですよ。顔も休も半分に。

もう、あまり長いことはないな。病気しなければいいなと思って。またそのうち金もってくるから、この金で精一杯食えと。後悔したって。何 回も死のうと思っただって。死のうと思ったけれども、子供達の顔を見ればそういうわけにもいかないし、今となっては、一日も早く往来できるようになって、兄弟に会いたいって、そればかりだって。ほんとに哀れなもんで

すよ。」

山田すてさん。33 年前すてさんの娘さんは子供 3 人を連れて再婚。朝鮮の新しいご主人と一緒に日本を離れました。

「私も死なないうちに会いたいと思ったけれど、なかなかこれじゃあ会えないと思ってます。おじいさんも、今年で死んで4年目になります けれども、すみえに会いたいなあ、会いたいなあ、って随分泣きました、男でも。寝てて思い出すとつらいですよ。夜もねむれません。どうして、あんなに、行かない、行かないって頑張っていたのが、どうして行っちゃったのかしらってね。ほんとに涙が出ますね。」

傷だらけのちゃぶ台。その上に飾られたすみえさんの写真。その写真を、たもとから出した手ぬぐいで、何度も何度もふきながら、すてさんが話してくれたのは、10年前でした。その後、山田さん一家は、息子さんの事業の失敗から家族が離散。すてさんは、養護老人ホームに一時身を寄せたものの、ある日突然そこを飛び出して、杳(よう)として行方が分からなくなりました。

日朝政府間の国交交渉は、一昨年1992年、大韓航空機事件や核疑惑の解明を日本政府が要求したため、決裂。日本人妻問題もたなざらしのままです。東京 - ピョンヤンの間は、直線距離でお

よそ1300キロ。飛行機でわずか1時間。
でも、日本人妻たちと日本にいる家族に
とって、世界中でもっとも遠い距離なの
です。母と娘を隔てる遠い、遠い距離。

鈴木きよこさん

「お母さんの手紙は何回来ました？」

「一回しか来てない。もうずっと前
です。夢を見てるみたいだった。何度も何
度も繰り返して見ました。」

「いま、ここにお母さんがいたら何て言
いますか。」

「お母さんって、飛びついていきたいで
す。」

母親が再婚、北朝鮮へ渡り、日本に
残った鈴木きよこさん。きよこさんが手紙

を受け取ったのは、26歳のときでした。

「お手紙本当にどうもありがとう。結婚おめでとうございます。きよこ、あなたが結婚するという手紙を受け取ったときには、母は情けなく、娘の成長した姿も知らず、いまさらなぜ母と名乗ることができるのでしょうか。あなたが7つのときに別れ、母はあれやこれやと考えれば、頭の中がいっぱいで気が狂いそうです。けれど、あなたはこの母を軽蔑もせずに、昔そのままのあなたですね。母はとてもうれしく思います。私たち母子はいつになったら会えるのでしょうか。床に倒れながらも、死んではたまるか、春はくるじやないかと、自分に自分をいきかせなが

ら、寂しさをこらえています。長生きをすれば、きよこに会えると思って、お母さんも歯を食いしばってがんばっています。あなたも弱気を起こさずに、今の旦那様と仲良く幸せに暮らしてください。さようなら。」その後きよこさんはお母さんと会えぬまま、不慮の交通事故に巻き込まれて、亡くなっています。

日本の家族のもとへ今もときれとぎれに届くいくつかの手紙。

「お父さん、お母さん、お元気でしょうか。もう一度、お顔を見たいと祈り続けていましたが、もうそれも。ごめんなさい。天国で、お父さん、お母さんに会

いたい。かずえの願いはそれだけです。
かずえ」

「私たちは何ひとつ買えず、帰国した
時のままの服で生きております。 ひろ
こ」

「ここでは死ぬのも自由がないところ
です。みそ、しょうゆもろくに食べられな
い始末で、今日までどうにか生きて来ま
した。 すみこ」

かつて新潟県帰国協力会の事務局
長だった小島晴則さん

「それはひどいものです。砂糖なんか
見たこともない。日本から帰国して、60
歳になったのに、もうよばよぼのばあち
ゃんになって、歯が何本か抜けているけ

れども、歯医者にも行けない。孫は生まれて 3 歳になるのに、まだあどけない、栄養失調みたいで、薬を送ってもらえないかと。むこうの極貧の生活が綴られたのばかりで、しかも、書いてよこされる紙というのが便せんじゃないんです。そこらへんの拾ったような紙、裏表びっしり書いているんですね。そして、今私が望んでいるのは、早く死ぬことです、と。何の希望もありません、と。私が死ねば、いくらか家族の分の食いぶちが浮くんじやないか。だから、今の希望は私が早く死ぬこと、それしかありません、と。こんな手紙を読んだときには、私は、胸をかきむしられるような、 そういう状態です

ね。そういうのが、家族のところに来てる
んです。」

1977年9月36人の家族は韓国へ渡
り、板門店から北朝鮮をのぞきました。
会えないなら、せめて、わが子、兄弟、
親たちがいる近くまで行きたい、その名
前を声を限りに叫びたい。

娘さんの手紙を肌で暖めては読んだ
高田さんもいました。「お母さん」と呼び
ながら飛びついていきたいと言った鈴木
きよこさんも。

「手紙一度も来ないでどうしているの。
早く、元気であるなら、手紙の一度くら
い、くれてね。おとつあんが生きてるう
ちにほんとに会い たかったって、おとつ

つあんが言ってたんだ。早く帰って来て、生きてるんだったら。」

「79 歳になりました。我が娘が朝鮮に渡りましてちょうど 20 年になりました。ただ、会いたい、会いたいの一心で、韓国に参りました。ただ 一目だけでもよろしいから、会わせていただきたい。」

「あなたが手紙をくれというもんだから、いつも手紙やはがきを出すんだけど、何の返事もくれない。

お母さんが死んでも兄が死んでも妹も死んだけれども、それでも何の返事も来ないが、どうしておるのか。」

「3 年したら帰ってくると言って帰ったのに。私はほんとうに見えるところまで来

てるんだよ。家族はみんな見えるところまで来てるのよ。」

「ばあちゃんは、いつまでも待ってるからね。早く帰って来てください。」

「しいちゃん、はよ帰ってね。一目だけ会いたいのよ、生きてるうちに。はよ帰って来てください。待ってます。はよ帰ってください。帰してください、北朝鮮の方。」

板門店からのぞむ北の国は、ぼんやりと白くかすんでいました。みんなの思いを託した鳩が、北の方向に向かっていっせいに飛び立ったとき、一人が「あの鳩になりたい」とつぶやくと、みんなは口々に「鳩になりたい」「翼がほしい」とい

って泣きました。

親が、子が、兄弟が、これほどまで求めあい、血の叫びを上げているのに、願いは、願いは届かないのでしょうか。

日本にたった一つ届いた加藤のりこ一家の声の便り。

「お義母さん、お元気でいらっしゃいますか。皆様に一度一目でもいいから会ってみたい気持ちでいっぱいです。お義母さんと兄弟のみなさまがそれほど愛しているのりこをこのように遠い所まで連れて来て、気苦労させていることと、一度も皆様に会わせることができず、本当に申し訳ないと思っております。」

「5年前に送ってくれた服、それにお義

母さんが体の具合が悪いというので薬を送ってくれたこと、本当に感謝しております。」

「一時は生きる力もなく苦労しました。頼る人もなく、頼る人もなく、本当に、一目だけでも会いたいですね。希望を抱いて強く生きなければ、気持ちはあせるけれど、体がいうことをきいてくれない。お母さんもさんざん苦労して、体にこたえるでしょうけれど、元気で過ごしてください。私のことは心配しないでください。私も、元気でお母さんに会える日まで頑張ります。ではほんとうにこれでさようなら。くれぐれも。お 母さん。」

生きている間にもう一度会いたい。そ

の声を聞きたい。その肌に触れたい。そう祈るだけの、父、母、兄弟。悲しみといらだちのなかで、

空しく積み重ねられる歳月。日本人妻も年を取り、それ以上に父と母の数は少なくなりました。生きている間の再会。でもそのために残された日々は、もう多くはありません。悲しい異国に生きる 1831 人の日本人妻に、ふるさとの懐かしい山を、思い出の川を、この日本のさんさんと輝く光を、さわやかな風を、土の香りを、そして、夢にまで見た母の顔を。

そう願わずにはいられません。

この放送は、当日早朝に放送されまし

た。日本人妻とその家族の声を中心に、ここに紹介しました。お名前ほ仮名にしてあります。一編集者注

活動記録(1997年1月現在)

北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会の活動

「北朝鮮帰国者の生命と人権を守る会」(以下「守る会」と略す)が去る三ヵ月間にくり広げた活動の中で最大行事は、1994年韓国に亡命した前北朝鮮帰国者呉寿龍、金初美夫妻を日本に一時招待したことである。勿論その間、日本を訪問した北朝鮮帰国者が全くいなかった訳

ではない。スポーツ選手や文化使節団の一員として、日本の地を踏んだ人が少しはいたが、自分の意思で訪問したのでもないし、そのまま日本にとどまることも許されなかった。それに彼ら(彼女ら)には、真実を語る自由もなかった。そして朝鮮人の夫に添って異国に渡って行った1,800人の日本人妻は、ただの一人の里帰りも墓参りも実現していない。

日本滞在中、呉寿龍、金初美夫妻は、東京、名古屋、大阪、新潟などで講演をし、共同記者会見も持ち、日赤、外務省、国会議員会館などを訪問した。「清津に上陸する瞬間、騙されたと知っ

た。日本で受けた以上の差別を、北朝鮮で受けたのが悔しい。自由なんて爪垢もない所だ。

私たちが命を賭けて日本に来たのは、北朝鮮の実状を広く知らせるためだ」と、二人は明かした。

日本のマスコミは、北朝鮮の赤裸々な姿を北朝鮮帰国者の口を通じて直接聞ける、良い機会として、非常に積極的に取材、報道した。朝日新聞、共同通信が東京集会の報道をしたので、多くの人が集会に詰めかけた。NHK ラジオは講演会のことを全国放送したし、TBS、テレビ朝日、日本テレビは取材チームを組み、名古屋、大阪、神戸、新潟など二人の行

く所に同行した。現地の新聞、放送が取材・報道したことは言うまでもない。

11月16日東京、文京シビックセンターで、季刊誌『生命と人権』日本語版の出版記念会が開かれた。この日、「妹からの手紙」という題名の歌が初めて発表された。北朝鮮に帰国した曹浩平さんを、日本に住む妹曹幸さんが切なく懐かしむという内容の歌だが、萩原遼さんが作詞して寺井一通さんが曲をつけた。

また「北朝鮮収容所に囚われた人々に自由を」という絵葉書が制作され、広く販売された。著名な童画家丘光世(おか・こうせい)氏が絵を描き、去年「守る会」が日本に呼んだ収容所の体験者、

姜哲煥、安赫両青年が詩を作った。この
絵葉書は当初「守る会」関西支部などの
運営基金にと制作したのだが、絵が美
麗である。

出版記念会場には朝鮮系ロシア人
女性が出席して、シベリアの伐採場を脱
出した北朝鮮労働者の困難な状況を詳
しく紹介し、支援を訴えた。

彼ら北朝鮮労働者は、些細なことで忠
誠心を公安に疑われ、作業場を逃げだ
した人たちだ。まだ日本では、これらの
事はよく知られていない。

捕まって北朝鮮に送られれば、投獄さ
れるか処刑される。だからといって韓国
に亡命もできない。北朝鮮に残っている

彼らの家族が、あらゆる迫害を受けるからだ。それで多くの脱出者たちは UNHCR に難民認定を受け、ロシアに定着することを希望している。「守る会」は韓国の「市民連合」に呼応して、脱出者を助けるための基金を集めている。中国に脱出した北朝鮮人が、中国官憲に捕まり続々北朝鮮に送還されているという最近の新聞報道は、日本社会に波紋を投げかけている。この間、北朝鮮から脱出した北朝鮮人が、ロシア、中国などに隠れて住んでいることは、日本社会では余り知られていない。中国当局が北朝鮮脱出者を強制送還している事実を初めて報道したのは、韓国の『東亜日報』だっ

た。その翌日、朝日新聞、産経新聞が、ソウル発としてこれを報道した。「守る会」は「市民連合」と緊密な連絡を取り合い、駐日本中国大使館及び中国国家主席宛に要望書を送り、彼らの強制送還を即刻中断し、難民として保護してくれることを要請した。

北韓同胞の生命と人権を守る市民連合の活動

この三ヵ月間、「北韓同胞の生命と人権を守る市民連合」(以下「市民連合」と略す)の活動は、在外北朝鮮脱出者の困難な状況を国内外の韓国人に知らせ

ることに主力が注がれた。窮状に置かれている脱出者に救いの手を差し伸べることは、第一に同族である韓国人の義務だからである。

「市民連合」は月一回ニュースレター(12 ページ)を発行しているが、この三カ月間論説、記事、投稿、などで、在外北朝鮮脱出者を支援しなければならない、と主張してきた。

通巻第 6 号に掲載された在ロシア脱出者李東成氏のアピール文、「私たちを助けて下さい」は読者の心の琴線に触れたが、ある月刊誌は彼のアピール文を全文転載した。

先立って「市民連合」は、ロンドンに

本部を置くアムネスティー・インターナショナルが発行した「在ロシア北朝鮮難民報告書」(AI Index:

ASA 24 / 06 / 96) を翻訳し、言論機関・政府機関・国会などに配付したことがある。幾つかの日刊紙はその要旨を紹介したが、東亜日報社が発刊している月刊誌『新東亜』は1996年12月号に全文を掲載したし、また尹玄「市民連合」代表とのインタビューを通じて「市民連合」がくり広げている「脱北者の生命と人権を守るキャンペーン」を詳細に紹介した。

広く知られているように『新東亜』は長い歴史を持った総合誌として、国内で広範に読まれているだけでなく、日

本、アメリカなど海外に居住する韓国人の中にも、多くの定期購読者を持っている。このインタビュー記事を通じ「市民連合」の「脱北者の生命と人権を守るキャンペーン」を知ることになった海外在住同胞たちが、同キャンペーンに参加する意思を明らかにしている。

「市民連合」ニュースレターの日本語版発行は、在日同胞社会のこのような動きを加速することと思われる。1996年12月ニュースレターの日本語版(12ページ)が発行され、日本で広く配布された。

1996年11月22日大韓赤十字社講堂で開かれた国際人道法セミナーは、「市民連合」の「脱北者の生命と人権を守る

キャンペーン」を、国際法・人道法を専攻する学者と赤十字運動関係者たちに知らせる良い機会となった。

脱北者の法的地位という二番目の議題に関連し、「市民連合」代表は「脱北者の生命と人権を守るキャンペーン」を展開する過程で現れた事実を、次のように指摘した。第一にロシア政府は北朝鮮当局を意識して、去る5月日本のNHKテレビが放送した脱北者射殺事件をいまだ明らかにできないでいるし、第二に北朝鮮とロシアの間に締結された林業協定には、林業労働者の人権を侵害する条項が含まれており、第三に脱北者が彼らの隠れ場を離れ、国連難民高等

弁務官室モスクワ事務所に行き手続きするのは非常に難しく、第四にロシアに定着することを希望する脱北者が、国連難民高等弁務官の救いを受ける道が事実上ふさがれている。このセミナーを契機に、「市民連合」と国際法の学者のつながりができた。

1996年10月季刊誌『生命と人権』が創刊され、その英語版が国際人権機関及び人権運動家に配布されてから、北朝鮮の人権状況に対する関心がヨーロッパの人々の間に徐々に拡散している。ソ連の強制収容所に関する立派な本を著述したフランス人ジャック・ロッシ氏は、

『生命と人権』に自分の文が引用されるのを快く許諾するのと同時に、シベリアの材木伐採場で働く北朝鮮労働者の辛い状況に対し大きな関心を表明した。またポーランド・ポズナン人権センター図書室責任者は、「とても興味があり、有益な本」と評価して、図書室に配置したことを知らせてきた。

1996年12月26日の東亜日報は、在中国脱北者の運命に関して非常に衝撃的なニュースを伝えた。1989年一年だけでも、四百人以上の脱北者が中国当局に逮捕、北朝鮮に強制送還されたが、1996年には48人が送還され、引き続き30余人が送還を待っているという

のが、その要旨だった。

「市民連合」は逮捕された北朝鮮の難民を、北朝鮮に送還しないことを要請する要望書を江沢民中国主席に送る一方、この事実を国連難民高等弁務官室など関係国際人権団体に広く知らせた。

pageの下段にある文章

p17

ジャック・ロッシ氏の証言

1930年代のソ連

略 歴

1909年フランス、リヨンの裕福なフランス人の家庭で生まれた。ポーランド人の

義父と一緒にヨーロッパ各地を転々と
し、16 歳でポーランド共産党に入党し
た。20 歳の時にモスクウに召還され、コ
ミンテルン 国際共産党 の要員として働
いた。1937 年に初めて逮捕されたが、す
ぐ、釈放される。1939 年二回目に逮捕さ
れた時は 22 年間も強制労働収容所に
入れられた。現在フランス、パリで著述
に力を注いでいる。

ありきたりな話

「吐きやがれ！ 白状しろ、この野
郎！ このうすぎたないファシスト野郎
め、てめえの反ソ活動をぶちまけるん

だ！この糞ったれ！」

昨日の夕方から私は取調官の尋問室のなかで立たされている。モスクワのあの有名なルビヤンカの獄のなかで。私にはいったい自分になにが起こったのかわからない。つい数週間前まで、私はスペインでレーニン思想の名のもとに命をとして働いていたのに、いまソビエトの取調官に小ぎたないファシスト呼ばわりされてモスクワにいる……

「吐くんだ！白状するんだ、このうすぎたないファシスト野郎め！糞ったれ！げす野郎！」

夜があける。取調官は交替したところだ。

「吐くんだ！白状するんだ、この小ぎたないファシスト野郎め！」

私は手をうしろに組んで、24 時間以上もずっとその場に立ち通した。

神経の緊張だろうか？ 私は疲労も飢えも感じない。48 時間後に、取調官は看守を呼ぶと、カードにサインしてそれを彼に渡す。看守は私を部屋の外に連れ出す。私たちはとある事務室の前まで来る。その部屋の中には軍曹がいる。彼は私の看守からカードを受け取ると、分厚い台帳の上になにか記入し、その上に大きな金属製のカバーをかける。私はわずかな隙間からのぞいてみて、ほかの箇所は隠されて見えないが、自分に

関係ある部分だけ見ることができる。

「署名しろ、ここに！」軍曹は鉛筆を突き出して言う。

私はそこに自分の名と日付と時間を見る。5時43分だ。2日前にここに着いてからというもの、いつも同じ手順だった。

看守は私の後ろについて歩きながら、私を前へ進ませる。彼はたえず自分の革ベルトのバックルに鍵をぶっつけている。監獄によってはこのシグナルが舌うちにかわることもある。曲がり角や十字路や扉を過ぎるたびに、彼は「止まれ！壁に向かえ！」と私に命じる。そうしておいてから彼は、囚人を連れた他の

看守が近づいたりしないかと確認する。
これは囚人同士がたまたま出会うことを
避けるためにとる処置である。なにごと
によらず、偶然にまかせることは許さ
れない。ソビエトの何千とある監獄のど
こでも、囚人は所管官庁が望むか許す
かする場合以外、互いに出会うというこ
とはありえない。何世代も前からこうな
のである。

私はとうとう自分の監房の扉の前に
たどりつく。

「止まれ！」

私についてきた看守に私の房の係の
看守が近づき、示されたカードの上をち
らっと見ると、扉をあける。

ここへ来るあいだじゅう、私は規則通りずっと手をうしろにまわしていた。房の敷居を越えてからも、無意識的にそうしている。すべての顔が私の方を向く。監房のなかで、「自分の居場所」にいられるとはなんたる幸せか！ 私は再びわがものとなった共同の寝棚の上の 50 センチのわが居場所にどっと身を投げる。近くの一人がなにひとつ質問もせずに私の靴を脱がすと、腫れあがった私の足をマッサージしてくれる。だれかが前日の私のスープを持ってきてくれる。彼らはスープが配られるたびに、それを新しいのと取り替えてくれていたのだ。私には食欲がない。

疲労にうちひしがれて、うとうとしはじめる。すべてが消える。

突然、棍棒で叩かれでもしたかのよう
に、私は自分の名を聞き、目をさます。
扉があく。扉が私のうしろで再び閉ま
って、同じ房の仲間から切り離されるやい
なや、看守は手に持ったカードを見なが
ら私に名を聞く。私は答える。彼の二人
の仲間が私の腕をねじあげる。取調官
室に送り込むまで、彼らは軍曹のあの
分厚い台帳にサインさせる以外、私に手
を自由にさせない。

「吐くんだ！ このうすぎたないファシ
スト野郎め、白状するんだ！」

「なにも白状することはありません。」

私はときおり応じる。

そう答えるたびに、取調官の新たな怒りをかう。彼らは5、6時間おきに交替していたが、私はずっと手をうしろにまわしたまま立ち通しだ。それが5日6夜、続いている。

私には自分の周囲でなにが起きているのか、よくわからない。反射鏡の強い光線が消える。私は歩く………

ああ！私はいくつもの廊下に沿って歩かされる……私は軍曹のあの分厚い台帳に署名したのだろうか？

扉があく……自分の房にいられるとは、なんとまあ幸せなことか！

しばらく間があって、また私をさがし

に来る。しかし、これはいつものおきまりのコースではない。どこに連れて行かれるのだろうか？ 取調官のところでないから、たいしたことはないさ！...私は地下室へ降りて、扉を通りぬける。窓のない、がらんとした室だ。天井の電球がコンクリートの床を照らしている。黒っぽい、湿った染みがいくつついている。水道の蛇口と水の入ったバケツがひとつ。一人の下士官と二人の兵士が壁にもたれている。彼らは汗にまみれた額をぬぐっている。下士官は私の看守が差し出したカードを一瞥すると、それを鋏に通す。そこにはもう少なからぬカードが留めてある。彼らはひとことも言わずに

私をなぐりつける。どうして自分がコンクリートの上にいるのか、もうわからない。もやがかかる。私は目をさます。自分の上に、手からのバケツを持った一人の男を見る。自分が水をかけられたんだとわかる。起こされて、またなぐられる。げんこつで、長靴で、なぐられる。気を失う前に、私は下士官の上っ張りの上の共産青年同盟の紋章を見る。赤旗の上にレーニンの横顔のついたやつだ。私がスペインで命をかけて仕事をしたのは、この同じレーニンの名においてだった。

50年がたった。そのとき以後、もっと悪いものも私は見た。それにもかかわら

ず、この三人は私の記憶につよく焼き付いている。彼らこそ私 が明るい明日を約束するものと信じていたものの名において、私を拷問した最初のものだったからである。

ニキーフォル・ブローゾロフ

1937 年、大粛清の絶頂期。われわれはモスクワのブトイルカ監獄の一つの雑居房に、百人以上で入っている。国と党のアパーチキ[幹部]、軍人、技師、学生、外交官、一人の切手蒐集家、二人のエスペランチスト、一人の聾啞者、何人かの外国人 коммуニスト、1905 年と

1917年の革命に参加した一人のオールド・ポリシェヴィキ。誰も自分に何が起こったのかわからない。みんな茫然自失の状態である…

扉が開いて誰かが監房のなかに押し込まれて来る。扉はすぐにまた閉まる。新入りは自分の不幸があまりにも大きなことに打ちひしがれて、身動きもせず、おびえてそこに突っ立ったままだ。誰かがかわいそうに思って、どこから来たのか知ろうとして、彼に話しかける。だが、まったく反応がない。やがてついに、彼は自分の経歴を語り出す。彼はニキーフォル・プローゾロフとって、モスクワから遠くないコルホーズの30歳の農民

である。首都にながく住んでいる旧友が彼に小さな広告ののっている『夕刊モスクワ』を見せてくれた。「求む指物師。モスクワ、ゲルツェン通り* *番地に照会されたし」(何番地か私は忘れた)。

もしかしてこれは、将来の見込みがまったくない、ひどいコルホーズから逃げだすチャンスかも知れなかった。これまでの仕事の代償として、プローゾロフはモスクワに 3 日間行くために、コルホーズの議長からサインと印を押した許可をもらった。

彼はゲルツェン通りに行ったが、問題の番地を見付けることはできなかった。彼は近くの警官にたずねた。

警官は、そこはかなり遠くて、工事のため見つけるのがむずかしいが、なんなら車で連れて行ってやろうと言ってくれた。「モスクワでは まったく警官がなんて親切なんだろう！」すっかり感動したプロゾロフは思った。「われわれのホルホーズとは大違いだ！」そうこうするうちに警官は、その建物の壁の中にはめこまれていて、ほとんど見えない小さな箱を鍵で開けた。彼はそこから電話機を取り出すと、二言、三言しゃべってから受話器をおいた。彼が箱を閉めるか閉めないうちに一台の車が来て、彼らのいるところで止まった。警官はドアを開けて、いかにも愛想よくプロゾロフに乗る

ようにすすめた。「本当に、首都の人は
なんてまあ親切なんだろう！」

いっそう感動した彼はそう思った。

道程はかなり長かったが、それは監獄
で終わった…… これらのできごとは前
日のことだ った。

「おい、ちょっと」拘留されている一人
が聞く。「そのゲルツェン通りの番地って
のは* *番地じゃないか？」

「そうだよ」プローゾロフが答える。

「ああ、かわいそうに！ それじゃお
まえは日本のスパイだ…」

プローゾロフにはわけがわからない。

「お前の間違いじゃねえさ。だけどそ
の番地にはホテルがあって、日本の大

使館員が宿泊しているのさ。

数ヵ月前に彼らは指物師を一人求めていた。おれは外務省の技術サービス部あての彼らの手紙を見たんだ。

モスクワにいる外国の外交官の物品関係は全部ここで扱うことになっているんだ。そうすりゃ、やつらが地方人とあまり接触しなくてすむからな。おれは逮捕されるまでそこで働いていたんだ。きっと日本人は待ちきれなくなって、自分から小さな広告を出したんだらう……」

最初の尋問のとき、取調官はまずはじめに、なんで自分が逮捕されたか、ブローゾロフにたずねる。彼は知らないと答える。取調官はスパイ容疑だと説明す

る。新聞にのった広告は、日本のスパイが自分たちの工作員と接触をとるための策略だったというのだ……

「だけど私は日本の工作員じゃありません！」プロゾロフは抗議する。

「それを証明してみろ！」

「私は生涯コルホーズで暮らしてきました！ 7歳のときピオネール[少年団]に入り、14歳でコムソモール[共産青年同盟]に入りました。

軍隊にいたとき入党を許可されました。私は日本のスパイじゃありません……」

このかわいそうな男の真撃さと素朴さは全監房の同情をかった。ついに彼の

ために委員会が作られ、検事局に再審を嘆願する文章が作成された。

何週間か過ぎ、何ヵ月か過ぎる。

取調官のところへ連れ出されるたびに、だんだん彼の痛めつけられかたはひどくなる。彼は白状しない。ついに尋問は打ち切られる。三ヵ月たった。突然彼は「身の回り品をもって」出ることになる。これは彼が最終的に監房から出ることを意味する。しかし、どこへ連れていかれる

のだろう？

「きっとやつを釈放するんだよ。」

何通もの嘆願書を書くのを助けてやった一人が言う。

留置人の一人が自分の妻の電話番号を彼に暗記させる。

「電話していつものように来月は 50 ルーブルではなくて、45 ルーブルおれに送るように伝えてみな。そうすりゃお前があいつに会ったってことがわからあ。伝えてみな……」

そしてみんなこの運のいいやつと握手をしに来る。

2年後の1939年、私はまたしても行く先不明の囚人護送隊のなかにいる。囚人たちは先に何が待っているか、知るはずもない。スヴェルドロフスクで下車させられる。より正しく言えば、できるだけ地

方人と会わないように駅から 1 キロのところ
で降ろされる。厳重に監視されて中
継監獄まで連れて行かれる。

登録手続きのあと、いくつかのグル
ープに分けられる。私のグループは大き
な雑居房に閉じ込められる。

二百人以上つめこまれて、はちきれそ
うだ。囚人たちは寝棚や、テーブルや床
の上や、いたるところで寝る。

一見しただけで、彼らがすでに何年か
収容所暮らしをしてきたことがわかる。
私はこんな光景はかつて一度も見たこと
がなかった。まったく乞食の集団だ！

突然、私の耳に「ジャック！」という声

が聞こえる。

こんな大勢のなかで、どこから声が聞こえてくるのか知るのはむずかしい。ここでいったい誰が私だとわかったのだろうか？ 一度もスヴェルドロフスクに来たことがないのに！

下の寝棚から、でっかい髭の男が満面に徹笑を浮かべて近づいて来る、プローゾロフだ！ 私たちは兄弟のように再会する。

彼は日本のためにスパイ活動をしたことで矯正労働収容所八年をくらっていたのだ。*

* ジャック・ロッシ著『さまざまな生の断片』（外川継男訳、成文社、1996年）より

